

日本地政学の末路

村上 次男*

ナチス・ドイツにおいてハウスホーファーなどの地政学者が利用されたのは、多少伝説がかってはいるが、ナチスの世界政策に関係があったことは否めない。ハウスホーファーの『太平洋地政学』の決定版が世に出たのは、昭和十三（一九三八）年のことである。難解の書といわれたのは、たとえば「生活空間」「力域」「疎隔空間」「空間圧力」などのような独特の術語がやたらに出てくるせいもあるのだろう。『太平洋地政学』が佐藤荘一郎氏によって翻訳され、岩波書店から発行された時には、日本はすでに戦争の渦中に突入していた昭和十七（一九四二）年の二月で、初夏には第二版が出ているから、よく売れた本といえるであろう。*

京都帝国大学地理学教室の小牧實繁先生による『日本地政学宣言』が京都の弘文堂から出版されたのは、昭和十五年の秋のことであった。この本は米英と戦争状態にはいつてからは、東京の白揚社から再刊され、多くの賛同者を獲得したらしい。本もよく売れたらしく、いわゆるファンレターもたくさん著者宛に寄せられたという。それにつれて、その後の先生があちこちの雑誌などに書かれた文を集めて、『日本地政学覚書』が東京秋田屋から発行されたのは、戦争たけなわの昭和十九年初秋になってからのことである。

これに先立って、小牧先生を中心にした地理学専攻の京大卒業生が、ドイツで盛んになりつつあったと伝えられる地政学に興味を覚えきたものらしい。地理学の専攻者たちにとって、ラッツェルの『人類地理学』や『政治地理学』は、地理学の重要な古典であった。

* 元 甲南大学

なおこの文章は村上次男『回想は続く』（私家版）1993年所載の、6章「日本地政学の末路」と、7章「教職追放哀話」をまとめて、著者の承諾を得て転載したものである。ここでは「日本地政学の末路」というタイトルで掲載した。文末には補足として筆者に行なったインタビューについて水内の文責でまとめている。

自然地理学の祖といわれるアレクサンダー・フォン・フンボルトに対して、このラッツェルは人文地理学の祖とされていたし、みんな一度は文学部陳列館にあった書庫に所蔵されていたこれらの古典に触れたものである。因みに当時地理学方法論としては、A・ヘットナーの『地理学の歴史と方法』が一つのバイブルであった。地政学を取り入れようとしたのについて、このラッツェルの『政治地理学』に親しんだことが、一つの素因となっていたのかもしれない。

小牧先生だけでなく、もと教室の助手をしておられ、当時は小野鉄二先生の後を継いで和歌山高商の教授をしておられた米倉二郎先生もまた、早くから地政学に着目されていた一人である。米倉先生は、昭和十二年、戦線が中国に拡大するにつれて、その地政学的考察を発表されようとしたが、軍の短期に解決を図ろうとする意図に妨げられて、その論考は日の目を見ずに終わったという。この一文は、その後の実地踏査の成果を加えて、『東亜地政学序説』という一冊の啓蒙的な本となって、東京の生活社から刊行された。こういう趨勢のなかにあつて、小牧先生もますます地政学に傾いていかれたのであろうことは、想像にかたくない。

私はこのころ、まだ満州国鞍山市で、地理の教諭であるとともに、寄宿舎の舎監長を兼ねていた。昭和十六年の夏、書店から小牧先生の『日本地政学宣言』が配達されてきて、初めて地政学なるものに接した。考古学的な労作で知られた小牧先生がこういう著書を出されたことが、全く思いもかけないことであったが、机の上の空論になりがちな地理学の一つの革命のような感じを受けたことは確かである。

前にも触れたように、もともと好きで地理を専攻したわけではなく、どちらかという自然科学方面に興味を抱いていたのに、夏目漱石に憧れて文科に進んだ私であったから、腸チフスで大学の一年を棒に振ったのをよい機会に、文学部の科目のうち、一番自然科学

に近い地理学を選んだに過ぎなかった。

当時、主任教授は京大地理教室の草分けの任を果たされた石橋五郎先生であったが、先生は呼吸器を病んでおられたので、実際の講義を受けることができたのは、普通講義の他は、特殊講義の九回だけであった。その他の演習や特殊講義・講読などは、当時助教授であった小牧先生が担当されたから、小牧先生が実質上の主任教授であるといつてよい。石橋先生の普通講義および特殊講義の要点は、「古代から中世にかけての地理学はあらゆる学問分野にわたっていたが、近代に至って学問がしだいに深まっていくにつれて次々と独立の学問として分化していき、その脱け殻のような立場に追い込まれた。しかしあらゆる学問分野にわたる『橋渡し』の学問としての責務を負っている。その柱ともなるのが土地と人との関わり、『地人相関』といえるのではないか」というものであった。いろいろと各地へ調査隊や探検隊が派遣される時、地質学や生物学者はその行に加えられても地理学者というのは除外されることが多いのは、地理学が独特な研究分野を失っているからではないか、という反省もしきりであったのである。

そんな時である、小牧先生の地政学が登場してきたのは。地政学の本体を知らない人たちからは、「こんなものが学であるはずはない、単なる神懸かりではないか」と京都大学の中でも苦々しく思う人は少なくなかった。おまけに先生の生家が天津市坂本の神主さんであったから、余計に「神懸かり」の声はひどかったのであろう。

どこでもそうだが、主任教授だけが勝手にこんな冒険ができるものではない。先生の許で研究を続けていた学徒の中にも、何とか地理学で苦境にある祖国に役立ちたいという願いが起っても、その時期としては当然といえよう。小牧教授の許にはそういう選ばれた人が何名かいた。小牧先生はすでに亡くなられ、その側近にあった人たちも、多く亡くなったり、とうに現職を退いて晴耕雨読の立場になっておられる。このグループの実態は闇に包まれている。実態を知っている人も、しだいに数少なくなってきた、もう二三人に過ぎなくなった。また生きておられても、だれもその実態を語ろうとしないであろう。

そのグループに加わっておられた人々は、戦後ずっと「教職追放」の声に怯えを感じられたのか、グル

ープの一員であったことを秘しておられるように見えた。敗戦と同時に辞表を出して「教職追放」を免れても、戦争末期までこのグループに属していた人は、事実上学校へ復帰することは無理であった。この人たちがようやく大学へ復帰できたのは、昭和二十六年夏に「追放解除」が行なわれて以後のことになる。

私は遅れて、太平洋戦争が始まって以後、昭和十七年春からこのグループに加えられたので、詳しいことは知らない。僅かに聞き知っていることを述べていくが、真偽のほどは明らかではない。あるいは今となってはただの伝説に過ぎないのかもしれない。

地政学というのは、世界の地理・歴史を総合して国家の政策を探っていこうとするものだから、本当の研究成果というものとは極秘事項で、一般には公開されない。地政学の公刊された著書というのは、いわば一種のデモンストレーションか、思想戦の宣伝ビラのような意味しかもっていない。日本地政学の公表されたものは、正に「神懸かり」論議に過ぎない。また、非公開でなされた地政学の研究でも、正直言って学問ではないであろう。それは学問の一つの応用とでもいうべきものである。

たとえば、「シンガポール攻略に当たって、いくら大型の艦船を集結して海の側から攻撃しても、上陸占領するのは難しい、防備は陸の側に薄いから、艦船は援助攻撃するだけにとどめ、マレー半島の方に上陸した陸軍が主力となって攻撃するのがよい」というような戦術は、山下奉文大将によって実行されたが、これを最初に指摘したのは日本地政学の成果の一つであったという。その立案は当時助教授であった室賀信夫先生によると聞く。室賀先生は戦後は地図学史の権威者として多くの労作を遺されたので知られる。

私に加わったころも、各自が世界の地域を分担していた。アメリカは助教授室賀さん、ヨーロッパは専任の講師であった野間三郎君、南アジアは浅井得一君、シベリアは三上正利君、オーストラリアは和田俊二君、中国は米倉二郎さん、東南アジアは別枝篤彦さん、アフリカは朝永陽二郎さん、極地は川上喜代四君…にという具合である。その後、別枝さんはインドネシアへ、浅井君はビルマ（ミャンマ）へそれぞれ司政官として赴かれたため、太平洋諸島を受け持っていた私が、これらの地域もカバーすることになった。

この日本地政学を経済的に支えてくれたのは、軍部

であった。特に師団長クラスの将校OBの有志からなる「皇戦会」が大きな後援者であったようだ。それらから回ってきた資金によって、吉田山の西麓、吉田上大路の民家を借りたり、留守番を雇ったり、必要な図書を購入したりできた。当時としては溜沢な資金であったといつてよい。本物の研究室よりも書物を溜沢に気安く買うことができた。ここで週に一回ずつ会合がもたれ、順ぐりに研究結果を発表し、討議を繰り返した。それでだれいとなく、このグループを「吉田の会」と呼ぶようになったのである。

会の世話役は当時地理学研究室助手の任にあった岡本信太郎君が受け持っていた。岡本君は私とは中学校の同期生である。彼は病気のために大学卒業が数年遅れたに過ぎない。同じ同期生には和菓子の老舗「虎屋」の黒川君がいた。その縁故で、当時一般の人は口にすることができなかった高級な饅頭が、吉田の会には出された。もちろん、会の始まる前に岡本君が取りに行くのである。そのころの虎屋は、軍隊に納める羊羹や饅頭を作っていたが、店売りはもう一つもできなかった。この虎屋の饅頭が食べられるというのは、吉田の会に出席する一つの楽しみであったのは、今となっては笑い話であろう。

もう一つ軍部の恩恵に与ったことがある。それは学会などで東京へ行ったとき、夕食会や宿所の確保をして頂いたり、京都に参謀本部を代表して来られた時には、蹴上の瓢亭で当時普通には食べられないご馳走の会食をして貰ったことである。

実際に考察を展開したものは、本となって公刊されたりはしない。政策や戦略は事前に相手に知られてしまつては、何の意味もないのだから、当然のことであろう。公刊されたものでめぼしいのは、「蘭領東印度」「印度」の二冊だけで、あとは遂に未完成に終わった全集『世界地理政治学大系』と、単行本『大東亜地政学新論』（星野書店、昭和一八年）および『世界新秩序建設と地政学』（旺文社、昭和一九年）の二冊だけである。これらの監修は小牧先生、執筆は「吉田の会」のメンバーたちであった。

私が満州鞍山中学校を退職し、京都大学大学院にはいったのは、昭和十七年四月であった。その秋からは副手ということになり、翌年秋には「副手ノ囑託ヲ解ク」と同時に「本学部教務ヲ囑託ス」の辞令を文学部から受けた。しかし教務の事務をするわけではない。

文部省から研究費として月七十円を受け取るための肩書きである。七十円といえば当時の助手の給与と同額である。恐らく陸軍参謀本部の指図でこの給与が出ていたのであろう。私の他には三上君・岡本君らも受けていたはずである。野間君は昭和十八年度から専任講師だったので、これには加わっていなかったのだろう。昭和二十一年敗戦後の初春、研究成果を報告せよということで、私は「太平洋諸島の在るべき様相」を書いて出したが、それは形を整えるだけのもので、だれも読まなかったにちがいない。

そんな生活費に当ててもよいという研究費を貰いながら、大した成果は挙げることができなかった。私のした仕事らしい仕事は、次のようなものであった。

私が仲間入りした昭和十七年には、ニューギニア島をいかにして制圧するかの考察で、私はジャングルの海岸地方からはいるのではなく、航空機で山上の高原地帯に降下するのがよいというような意見を出した。小牧先生から「まるで高天原からの降臨だな」と笑われたのを覚えている。昭和十八年になると陸軍からの要請で、武漢地方から四川盆地への戦略図を作成された。この辺りの地形・歴史・産業などから総合的に判断して、それを図示するのである。参考の地図は航空機のための大きな多色刷りのものを提供された。

昭和十九年秋、皇戦会の方が吉田の家へ来られ、ミッドウェイ作戦が失敗し、空軍の精鋭を一挙に失ったこと、南京虐殺事件で国民政府との和解が不可能になったこと、優秀な空軍の勢力を失ったので、各地で戦況が不利になりつつある、などの真相を告げられた。新聞に出る大本営発表とは大違いで、少なからずショックを受けたことである。

最後には昭和二十年の初めの九州地方の戦略図の作成である。一々読んでいる暇はないから、図を見ただけで判るように表現して欲しいとの要求であった。米軍の上陸地点の予想には苦勞したが、作成した地図が役に立ったかどうかは知らない。

東京について大阪も大空襲を受け、京都も危ないというので、文学部陳列館や研究室に所蔵していた古地図類や貴重な書籍を大八車に積んで、百万遍から洛西の大覚寺までの10Km余を運んだ。岡本君・三上君と私が主に車を引っ張り、小牧先生と野間君が後押しを受け持った。一つも苦にならなかったのは、気が張っていたからであろう。

夏、戦争はついに終わった。初秋には吉田の家も処分することになり、集めた数千冊の図書や資料はすべて処分し、その売り上げはすべて戦災地へ寄付するよう、新聞社に委託した。それは確か朝日新聞社だったように記憶する。

無条件降伏からしばらくして、占領軍は京都にも進駐してきた。早速小牧先生のもとに米軍将校がやってきて、これまで作成したものをリプロデュースして提出せよとのことであったが、資料をもう全部処分してしまったから、再生産はできないと断ったという。

戦後、マッカーサーの顧問団の指図で、日本では地政学や政治地理学の研究はまかりならぬとの通達が出された。一時的ではあったが、修身や柔剣道はいうまでもなく、日本史や地理さえも教育の場から迫放されたことがある。修身はついに復活されなかった。

近ごろ、日本の外交が世界に遅れをとっていることが指摘され、特に湾岸戦争の勃発やソ連の解体に際しては、そういうことが目立った。テレビの解説には、軍事評論家とか国際政治学者などが売れっ子になったが、いずれも視聴者の納得のいく解説をするまでには至らなかったようである。

こういう時こそ、昔は地理学者の活動の場であった。私の家へも新たな戦局を迎えるたびに京都新聞社の記者がやってきた。例えば日本軍がタイ國の奥地へ侵入すると、タイの少数民族の解説記事を書かされた。書き上がるまで、記者は玄関で待っていてくれたものである。戦後、町でその系の記者に偶然逢ったことがある。すると彼はフツと目を反らして知らぬ顔を決め込んだ。こちらは追放の身である。新聞記者のご都合主義に撤した人情を思い知らされたような気がしたものである。

こうして「吉田の会」も跡形もなくなったが、それに参加していた人の残りの人生に多くの後遺症の影を落とした。

その後の地理学の研究が世界的視点を失って、地域にこだわり過ぎてきて、社会学や文化人類学の色彩が強くなったように見えるのは、マッカーサー司令で、地政学はもとより政治地理学的な研究が禁止されたことと無関係とは思われない。

* * *

私の一生に大きな影響を与えたのは、戦後になっていわゆる「教職迫放」の処分を受けたことである。「お前は学校の先生としては不適格である」というお墨付きを頂いたわけで、米軍占領下にとられた措置の一つではあるが、実際にその判定に携わったのは、米国人直接ではなく日本人任せであったのだから、その審査が時として純粹さを欠いたものになったこともあるらしい。自分と考え方の違ったものを排除して、自分の思い通りの人事にしようという意図に利用された面もあったとも聞いている。

私にしたところが、私に「不適格」を通知してきたのは、京都の龍谷大学であった。戦争中、私は龍谷大学に非常勤講師として出講していたが、戦争末期の昭和十九年度には、もう学徒動員で講義はなくなっていた。もちろんその時点からは給料は貰っていない。非常勤講師というのは一年契約だから、昭和十九年四月からは講師の資格は失っていたに違いない。それなのに、昭和二十二年五月十二日付けで「昭和二十一年勅令第二百六十三号第一条第一項二依り本職ヲ免ズ」という辞令が浄土真宗本願寺派宗務所から送り届けられたのだから、面食らったのも当然であろう。その他の関係していた学校には全部すでに辞表を出して受理されており、当然籍はないものと思っていたから、龍谷大学だけには改めて辞表は出していなかったのである。それだけに、龍谷大学の設置者である宗務所からの通達は、寝耳に水という感じであった。

龍谷大学か宗務所かどちらの判定によるものか、それははっきりしないが、とにかく非常勤講師の私をスケープゴートにして事をかたづけようとしたことは確かであろう。そう私に思わせたのは、後に新聞に龍谷大学の教職迫放には不正があったと報道され、改めて僧籍にある教授二名が迫放リストに追加されたからである。

当時私の周辺にいた人のうちには、異義を申し立てたらどうか、それで解除された人もいるのだからと、言ってくれるものもあった。しかし、私は自分がくっついて行動していた元京都帝国大学地理学教室主任教授小牧實繁先生が、同じくすでに辞表は出しておられたのに、やはり教職迫放という処分を受けられたことを思うと、私が同じ処分を受けても少しもおかしくない。それで私は止むを得ない処置と観念した。

教職不適格・教職迫放の烙印を辯されると、一般の

人は私を軍国主義者とか、右翼のコチコチのような目で見る。私がようやく追放解除になって、神戸の甲南高へ職を奉じた時、面と向かっていうものはさすがにいなかったが、陰ではいろいろに囁かれ、白い目で見られていたことは推察できた。進歩的と考えてちょっと社会主義に傾いた言動をする先生にかかると、私などは反動の極みに見えたのであろう。

言い訳をするわけではないが、過去に私の講義を聞いた生徒や学生たちは、決して私をそうは見なかっただろう。最初教壇に立ったのは、満州の鞍山中学校においてであった。その時の教え子たちは今も毎年集まっているが、口を揃えて「配属将校が幅を利かせていて、学校の内務班化が進められていた当時、自由な空気を持ち込んで来てくれたようで、清新の気を感じた」と言ってくれる。

甲南での教え子たちも、だれ一人として私を軍国主義者とか、右翼思想の持ち主とは見ないであろう。その私が、教職員組合の委員長に選ばれたことがあるのだから、白い眼で陰口をたたいていたのは、ごく一部分の人に過ぎなかったのかもしれない。

私の指導教授やそれに従っていた私自身が教職追放になったのは、あきらめがつくが、あの人が？と呆れるような先輩も追放に連座した。その最たるものとして、立命館大学の地理学担当教授であった岩根保重氏を挙げることができよう。

岩根さんは山口県の出身であったから、山口高等学校を卒業した私の父も岩根さんの御尊父を知っており、また私の兄も広島高等学校で岩根さんといっしょだったので、ただの地理教室の先輩というだけの関係ではなかったのである。

父から聞いた話であるが、岩根さんのご尊父は勇太郎というお名前だったという。ある時宴会の帰り道、尿意をもよおして立ち小便をしたところ、場所が悪く交番の傍だったので、巡査に見咎められ、「こりや、名前を言え」と怒鳴られた。仕方なく、「いわね」と答えたところ、言わねえとは何事じや、名前を訊いとるんじや、名前を」と巡査はますます居丈高になる。そこへさらに「勇太郎」と答えたものだから、「何を？本官を愚弄する気か！言うたろうとはふざけるな」とカンカンになったそう。当時、山口では有名な話だったと、父は笑って話してくれた。

保重さんはその息子である。その岩根先輩が、立命

館大学から「追放」の処分を受けたということを知って、私は呆れ返る思いがした。岩根先輩は別に戦時中に軍に特別協力したり、アメリカを誹謗したわけではない。どうも地政学の牙城のように思われていた京大地理教室に出入りしていたというのが、追放の理由になったらしい。立命館は当時御所の東に隣接していたから、学生・生徒をひっくくめて「禁衛隊」というのを組織していた。御所をお衛りするという意味であろう。教授たちがその隊長の役に就いていたように記憶する。そういう中であって、何故岩根教授だけが教員不適格と認定されたのか、よくは理解できない。

失業の憂き目に遇った岩根さんは、家族もろとも山口の郷里へ引き揚げられた。退職金も貰えないので、家族を養うためにはまず働かなければならない。私も同じ目に遭ったのでよく苦渋が分かるのであるが、教職に就けないとなると、岡へ上がった河童同然だから今日の言葉でいうと「3K」（汚い・きつい・暗い）の仕事しか働くところはない。ゲートル（脚に着ける脚絆）を巻いて進駐軍の宿舎を建設する土方の仕事に出たのはいいが、若くはないのもたまたましていたら、軍靴で蹴られたという。同じような仕事で、私の家族が両親とともに疎閲していた大島の安下庄へ来られ、ついでに家房の私の家へ立ち寄って下さった折に、ズボンをたくし上げてその傷跡を見せられた。

結局、岩根さんは教授として帰り咲かないうちに、この世を去っていかれた。そのころはすでに私たちの家族も京都に帰っており、お葬式も何も知らなかったので、だいふ後になって人づてに耳にした過ぎない。私のようなものが教職追放されるのは当たり前としても、岩根さんのような温厚な地理学者がこんな悲惨な目にあわれるとは、何としても納得がいかない思いで一杯である。

こういう岩根さんと同じように志とは異なった結果を辿られた人は、他にもきつとおられるにちがいない。教職追放になると、好戦的な軍国主義者かカチカチの右翼人間とみなされるようである。ところが心底からの右翼という人は実際には余りいない。

おかしいと思うのは、私に追放を傳達してきたのは、龍谷大学の設置者である「本願寺派宗務所」であったが、解除を傳達してきたのは、文部省であった。邦文タイプ印刷で、「指定解除書、本籍地山口県、氏名村上次男、明治44年7月7日生、教職員の除去、就職

禁止等に関する政令（昭和 22 年政令第 62 号）第 4 条の 3 の規定により、教職不適格者としての指定を解除する。昭和 26 年 10 月 3 日、文部大臣天野貞祐」というのがその全文である。それとともに『教職適格確認書』というのが届けられた。「右の者は、昭和二十年十月二十二日付連合軍最高司令官覚書日本教育制度に関する管理政策、同月三十日付同覚書教員及び教育関係官の調査・除外・認可に関する件に掲げてある条項に当たらない者であることを確認する。備考、この教職適格確認書は、本人の提出したところの昭和二十二年政令第六十二号第六条の規定による書面にいつわりのことを書いてあったり、又は書かねばならないことを書いてなかったときには、その効力はない。尚頭書の者は昭和二十六年八月三十日教職員適格再審査会において適格と判定されたものである。」

教職不適格を通知してきた宗務所の文書や、指定解除の文部省の文書は、今となっては珍品の部類に属するだろうから、私は大事に保管している。けれども私が死んだら、どうせ焼き捨てられてしまうにちがいない。私の歴史は終わったのである。

補 足（水内俊雄）

1998 年 11 月 26 日午後、村上氏を久武哲也氏のアレンジで甲南大学にお招きし、インタビューを行ったこともあわせて記しておきたい。参加者は、村上、久武氏のほか、高木彰彦、水内俊雄、荒山正彦、大城直樹、サビーネ・フリユースチック（ウィーン大学）の各氏であった。当初はこのインタビュー内容も掲載する予定であったが、久武氏と協議の上、事実確認に時間を要し、再度インタビューをお願いする必要性もあり、もう少し時間を設けることにした。

村上氏は明治 44（1911）年の生まれであり、戦時中の京都帝国大学の地理学教室には 30 代半ばで接された世代からの数少ない活性化された回想であり、インタビューであった。「地政学の末路」の読後感はある程度背景を知っている者とそうでないものにとってかなり異なるであろう。私は後者であり、ほぼ初めての事実へ接した直感的な印象は、京都帝国大学地理学教室が地政学に関わった負の伝統、不幸な歴史があるという批判のステロタイプ化や、地政学のタブー視

する長い間の風潮が築き上げてきたイメージに対して、村上氏の筆致は淡々とその当時を振り返られ、その事実提示の重みが読者に判断を迫ってくるような気がしてしまった。

関心をもって小牧地政学を読んでも、アカデミズムでもミリタリズムでもないお坊ちゃん的地政学が垣間見られただけで、どうも当時の生臭い政治と結びつかず取っ掛かりがないと私は棚上げしてしまっているだけであった。後日京都の地政学の本格的な分析の登場をまつとして、個人的に印象を受けたいいくつかの事についてインタビューの内容を加味しながら、少しだけ補足しておきたい（以下敬称略）。

インタビューも村上の入学当時の回想から始まるが、「日本地政学の末路」（以降「末路」と記す）には述べられていないこととして、まず小牧評価についてである。それは考古学的な業績をつんでいた小牧がいきなり地政学宣言で登場することが「末路」では思いもかけないことと表現されている。当日村上が配布した出典不明ではあるが、小牧が 1980 年ころに書いた「戦前・戦中・戦後」という小文がある。小牧自身は昭和 2（1927）年の欧米留学の機会に「滞在地英国の首都ロンドンで見せられた英国全国民に張る強い愛国心に魅せられた私は昭和四年帰国を前に強度の愛国心に捕らえられていた。そして京都帝国大学文学部の教授として必要な学位論文の作成に努め、昭和十一年末、その作成提出を終わると、東洋伝統の思想「地は政の本なり」の根本原理に従い、「日本地政学」の研究に留意することとなり、昭和十五年十月十七日「日本地政学宣言」の発表ということになったのである。心ある研究者、また一般読書人からも、従来の地理学とは若干趣を異にし、その志向するところが多少とも動的であることにより意外と清新の気に富んだものとして迎えられ、要路の人達のうちにも隠れた読者が数を増しつつあるらしくなった」。

インタビューでは、実際小牧は自分の考えを述べたりすることはなく、人にやらせるばかりのところがあり、あまり研究熱心ではなかったようにみえたこと。また石橋とはことなり、地理学の研究がこうであるとか、思想がどうこうのといったことを聞いたことはなかったと評価されている。以降「吉田の会」まで含めて、小牧の肉声というのはインタビューからもたしかにほとんど登場してこない。村上が話しを聞いてもっ

とも感心したのは、別枝、松井、室賀、野間であり、また米倉が小川の真の後継者であるといったふうに、やはり小牧の学問上での影響は薄かったようである。

次に私も以前から関心のあった、地理学教室と満鉄との関係である。奇しくも村上は、昭和 11(1936)年に学部卒業後鞍山中学に地理の教師として就職している。この時点で卒業生が満鉄と関係して就職する最初の事例であったようだ。東京高師出身の理学部の地質の教授が鞍山中学で空いたポストを探しており、それを小牧に相談を持ちかけたことが、就職のきっかけであり、そして当時の満鉄総裁の松岡洋右と村上の父が同郷の知り合いと言うことで、病弱であるのに採用してもらったと述べている。この個人的関わりはその後広がることはなく、いずれにせよ興味ある満鉄調査部と地理学の卒業生との関係はまったくたどれないとのことであった。

昭和 17(1942)年 4 月に鞍山から京都にもどり、昭和 15(1940)年に結成されていた「吉田の会」に村上は副手待遇の院生として参加することになる。その財政的後援者であった「皇戦会」との関係に触れた中で、小牧が四王天延孝の影響を強く受けていたのではないかと村上是指摘している。四王天については「末路」には触れられていなかったが、四王天は、『世界大戦未来記』(建國會東海聯合會, 1931 年)、『亡國メデーとフリーメーソンの正體』(愛國義團本部, 1937 年)とか、『猶太思想及運動』(内外書房, 1941 年)の著書で察することができる、反ユダヤのプロパガンディストであった。村上も小牧の四王天からの影響について、吉田の会を隠密にしようとして、週に一回、木曜日の午後 2 時に集まり、6 時頃終わったが、四王天の影響がフリーメーソンとかそういう団体に聞き取られたらいかんということで、いまから思うとアホみたいな話だが、小牧はそういうことには実に慎重であったと述べている。思想的にどのように関わりを持ったかは分析してみるしかないが、どうもフリーメーソンなど持ち出されると、神懸りと思わざるを得なくなってもくる。

もうひとつ重要な指摘は、小牧と陸軍、「皇戦会」を結びつけたのは、『世界新秩序建設と地政学』の北極と南極を執筆担当した川上喜代四の兄の川上健三ではないかと述べられていることである。「吉田の会」にも 2、3 度来たとの記憶があり、1941(昭和 16)年にアルスから出版されたナチス叢書のひとつとしての『ナチスの地理建設』を著しており、戦後は外務省条約局につとめ、海洋法会議以降の国際漁業の動向などに詳しく、『竹島の歴史地理学的研究』(古今書院, 1966 年)を著していることを付記しておきたい。あわせて小牧と東京の地政学関係団体との関係についてはなかったのではないかと村上は推測しているが、今後の探究が必要であろう。

それと最も重要なことであるが、なぜ小牧が地政学というものをいうようになったか、ある日突然神のお告げがあったとかもいわれているが、そのへんについての村上の発言を少し参照してみよう。小牧は昭和 13(1938)年に大学の学生向けの新聞などに、地政学に関する発言を始めているが、それは「皇戦会」との接触以前であり、そして決定的にはやはり室賀の影響が大きかったのではなからうかと観測している。黒正蔵との関係も指摘されている。これについては京都大学図書館に蔵されている室賀コレクションの講義ノートなどの詳査も含めて、さらに事実発掘を深めて行く必要がある。

「吉田の会」の日常についてであるが、戦時中でも本はとにかく丸善なんかで自由にかつ潤沢に買えたということが「末路」にも記されているが、終戦後の古本屋へのその処分金が 2 万円に達したと村上は述べている。数千冊と「末路」で述べられているが、1 万冊以上が 5 年間で蔵書されたのではないかと推測している。

インタビューでは全般的に「末路」に書かれている以上の新事実はそのほど多くはなかったが、継続的な聞き取りも予定しているので、後日稿を改めることにしたい。